

## 赤ちゃんのリズム感と歩行リズム

「リズムカルな運動は全身の様々な組み合わせによって創られる」ということを子どもの歩行のことから少し整理してみます。まず、赤ちゃんは、いろいろな音に対しては敏感に反応しますが、この反応は大人の反応とは少し違っていています。第一、大人はいろいろな経験から学習していますので、過去に経験したことの記憶をたどって“分析”を始めます。もちろん、多くは無意識でおこなっていますが…。

しかし、赤ちゃんの場合は、この“過去”の記憶が少ないので、その音が聞こえた時点で、これから何がおきるのかといった感じで、分析することになるわけです。つまり、ある意味では“未来志向？”といった感じになるわけです。そして、このことが、赤ちゃんにとっては非常に重要な意味を持つこととなります。つまり、次に何が起きるのかと構えているのですが、もちろん言葉や意識を通したものではない脳の活動です。ここで、短いタイミングで、もう一度同じ音が聞こえたとします。そして、その同じ時間間隔で、次々と音が聞こえてくると、今度は一つ一つの音に対する“分析”ではなく、音と音との時間を“分析”することになります。

これが、赤ちゃんが音と音との間を感じる…、つまり時間間隔を意識するきっかけとなります。もし、この音が2回だけ聞こえたとしても、やはり時間を意識することになります。ある程度、連続的に音が続くとなれば、はっきりと意識することになるでしょう。これが赤ちゃんにとってのリズム感の始まりです。ところが、それだけでリズム感が固定されるかというと、どうもそうではないようです。かならず、手足をバタつかせたり、瞬きをしたり、首を動かしたりと、なにがしかの身体反応が起きることが分かります。つまり、赤ちゃんはリズム感をしっかりと脳の中で固定するのに、“動きの感覚”として固定することになります。

こうして、リズム感とはリズムカルな運動として学

習することになるわけです。この学習の仕方は、大人になっても生涯にわたって続くこととなります。

（正確に言えば、年齢とともに学習の質は少しずつ違ってきます）。いずれにしても、赤ちゃんの全身の様々な組み合わせによって創られるリズム感は、歩行に向けた重要な第一歩となります。これは、哺乳動物に組み込まれた最も基本的な「移動運動」としての本能によるものです。早熟に生まれた人間の赤ちゃんは、他の哺乳動物よりも歩くのは遅いのですが、少なくとも、歩くことにつながる刺激に対しては非常に敏感です。ですから、音が鳴って、その音がいくつか連続して鳴り始めると非常に興味深く（大人から見ると、そういうふうに見えます）、しかも身体的な反応を示します。

ここまでの話をすると、あることに気がつきませんか？赤ちゃんをあやす時に、昔ながらのあやし方でリズムカルな音を出すことが多いですね。子守歌のリズムは少し異なりますが、手拍子をとったり、赤ちゃんの手足を揺らしたり、触ったりと…これは地域によって異なりますが、何かと言葉を伴うことが多いようです。私が住んでいる徳島では、「チョチ、チョチ、ナー」といった声かけをよくします。それぞれその地域でのあやし方のリズムが、実は赤ちゃんの歩行のリズムに一致しやすいのです。

